

保健室経営

子どもの育ちをつなぐ保健室経営

—「しめす」「みとめる」「みとる」ことの共有—

雨宮 恵子

1 はじめに

本稿は、子どもの育ちをつなぐ保健室経営の考え方とその実践を示すことを目的とする。子どもたちが生き生きと生活する中で、能動的に学びながら成長するための保健室経営をしたいという思いから、子どもの生活を起点とした保健室経営の具体的な在り方を明らかにしていくことを研究課題とした。

日本学校保健会は「学校保健の課題とその対応」の中で保健室経営を次のように定義している。

保健室経営とは、当該学校の教育目標及び学校保健目標などを受け、その具現化を図るために、保健室の経営において達成されるべき目標を立て、計画的・組織的に運営することである。

1)

そして、養護教諭には保健室経営計画を作成し、計画(Plan)・実施(Do)・評価(Check)・改善(Action)のマネジメントサイクルにそって活動を展開することを求めている²⁾。

この定義における保健室経営は、子どもの実態に応じた教育目標等を達成するためのものであるが、ともすると、内部管理に関心が置かれ、計画を実行するための経営と捉えられることが多い。このような捉え方は、子どもを取り巻く生活のつながりを見落とし、教育が教育する側である教師主体となってしまう危険性がありはしないだろうか。そして、養護教諭を含む教師たちが設定した種々の目標のために、子どもの生活が細分化されはしないだろうか。

保健室経営は目標を達成するためのものではな

く、子どもたちを能動的学習主体とし、成長に導くためのものでなければならない。P.F.ドラッカーは著書「マネジメント—基本と原理—」の中でマネジメントの機能を次のように述べている。

マネジメントの役割は成果をあげることにある。(中略)まさに組織の外部に成果を生み出すために資源を組織化することこそ、マネジメントに特有の機能である。³⁾

これを保健室経営にあてはめると、「保健室経営の役割は子どもを成長させること(=成果をあげること)にある。子ども(=組織の外部)に成長、特に健康に関する望ましい生活習慣の定着(=成果)を生み出すために家庭の教育力、教職員の教育力、養護教諭の専門性(=資源)を組織化することが保健室経営における特有の機能である」と捉えることができる。このドラッカーの論を踏まえた活動を展開すれば、内部管理ではなく、子どもの成長により関心を寄せた保健室経営が可能となると考えた。

子どもたちは家庭を基盤とし、幼稚園で、地域の中で、日々生活しながら刻々と成長していく。同時に年月を重ねながら、日々刻々と成長していく。ドラッカーの論に立脚し、生活の中で刻々と成長している子どもたちの目線で子どもの生活を見つめ、保健室経営の在り方を考えたとき、子どもの育ちにおける横の生活のつながりである家庭、幼稚園等の「場・環境」と、縦の生活のつながりである「時間」の二つをダイナミックにつなげ、またそのつながりを活かしながら、子どもを成長に導いていくという視点を外すことはできない。つまり、子どもたちを能動的学習主体とし、成長に導く保健室経営とするには、子どもの生活が起

表1 子どもの育ちをつなぐ保健室経営と内部管理重視の保健室経営との比較

カテゴリー	子どもの育ちをつなぐ保健室経営	内部管理重視の保健室経営
関心	子どもの成長重視	内部管理・目標管理重視
視点	子どもの生活が起点	教師中心
保健室の機能	保健指導が中核	健康診断, 健康相談, 救急処置, 保健指導, その他横並び
プロセス	創発的に実施	計画に沿って確実に実施
家庭	主体, パートナー	指導・助言の対象
教職員	主体, パートナー	チーム, 協力者

点とならねばならないと考えた。

さらに実践では、次の三点にこだわって子どもたちの生活をつなげていきたい。

- ①子どもたちが生活の中で能動的に学びながら成長することが重要なので、保健室の機能の中核に保健指導を置いた実践。
- ②子どもたちの生活の中で保健指導の取り組みが継続され、子どもたちの体験や学びがつながることが重要なので、生活の基盤である家庭、教職員とつながり合うために、「しめす」「みとめる」「みとる」ことを日常的に共有し合っていく実践。
- ③異なったテーマの複数の取り組みが、子どもたちの生活の中で将来的につながり、子どもたちが生活の中で主体的に実践できるようになることが重要なので、長期的な見通しを持ちながら、日々の実践の中で“その時”の子どもたちの実態に沿った取り組みとなるよう、方向性を見定めながら目標達成までの全体像を形作っていく、創発的なプロセス展開による実践。

子どもの育ちをつなぐ保健室経営と内部管理重視の保健室経営との比較を表1に示す。

2 子どもの育ちをつなぐ保健室経営の構造

(1) 保健指導を中核とした保健室経営

子どもたちが生活の中で能動的に学びながら成長するには、保健指導が保健室経営の中核にならねばならない。特に子どもたちを望ましい生活習慣の定着に導くために、集団指導を重視する。な

ぜなら、子どもたちは集団指導の中で目標や生活の在り方といった望ましいモデルを共有し合っていれば、実生活の中で「歯をみがくと気持ちがいい」「朝ごはんを食べると元気に遊べる」といった実感や、できた喜びをも共有し合うようになるからである。モデルを共有し合い、達成感を共有し合うことで、子どもたちは互いにに関わり合いながら能動的に学び、成長していく⁴⁾。

特に幼児期においては、新しいことができるようになるのと、できた喜びを「一回できたよ」「ぼくは三回だよ」と数や大きさで表現し、競い合うようになる。また、教師にほめられている身近な友だちの姿を見て、自分もほめられたい、認められたいと意欲を高める。一人ではなかなかできないことも、集団生活の中で互いに刺激し合い、確認し合いながら、できるようになった喜びや達成感を味わうことで、子どもたちは自己肯定感を高め、望ましい生活習慣を身に付けていくと考える。

(2) 家庭、教職員とつながり合う

養護教諭が集団指導を一度行っただけでは生活習慣は定着しない。日常生活の中で取り組みが継続され、子どもの生活の中で体験や学びがつながることが不可欠である。子どもたちは生活全般で成功体験を積み重ねながらその習慣を身に付けていくと考える。

そのため、子どもたちの生活の基盤である家庭が主体となり実践でき、また、全ての教職員が協働し、それぞれ主体となって日常の保育の中で継続的に実践できるようにするために、家庭、教職員と日常的につながり合う活動をしていかねばな

らない。

①家庭とつながる

子どもたちの生活の基盤は家庭なので、家庭とつながり合う保健室経営とならねばならない。私は家庭とつながり合うために、情報発信、保護者とのコミュニケーションの二つを重視したい。

1) 情報発信

私の有する情報発信ツールは、保健便りと掲示が主である。保健指導、保健便り、保健掲示は常にリンクさせ、保健指導後にタイムリーに発信するよう心がける。さらには、「その時だけ」の発信ではなく、子どもたちの育ちや幼稚園が継続して取り組んでいる様子が伝わるよう、繰り返し発信する。そうすることで、子どもの健康に対する保護者の意識を高め、家庭での実践につなげることができると思う。

2) コミュニケーション

子どもたちの実態や保護者のニーズをつかむためには保護者との連携が重要であるが、“連携”に留まらず、日ごろのコミュニケーションを大事にし、話しやすい関係を作ることが家庭とつながる鍵となる。

幼稚園からの情報発信ツールは保健便りをはじめ様々あるが、保護者からの情報発信ツールは“直接話す（書く）”ことしかない。保護者からの声を真摯に受け止める保健室であることが、子どもたちの育ちをつなげていく第一歩である。

また、保護者とのコミュニケーションを通して活動や取り組みの評価も可能となる。例えば、何気ない会話から「保健指導のねらいが伝わっていない」ことに気づく時がある。その時、活動の在り方を見直す必要があるということを実感する。逆に、保護者から保健便りの感想や、家庭での実践が語りはじめられれば、保護者の意識が高まり、子どもたちの生活の中で取り組みが繋がってきたと言える。

さらに、保護者同士のつながりを活かすことも、保健室経営を展開するうえでの有効な手段となる。保健室の活動を理解し、我が子の成長を見取った保護者は、他の保護者や仲間同士で話題にするこ

とが予想される。保護者から保護者へ、家庭から家庭へと活動の輪が広がれば、子どもたちの学びや体験をより効果的につなげていくことができるであろう。

②教職員の協働

教職員が協働する取り組みとするためには、二つのことが重要である。一つは各自の強み(専門性)を活かすことであり、もう一つは活動や取り組みの意図を共有し合うことである。

1) 強みを活かす

取り組みが子どもたちの幼稚園生活の中で継続されるには、養護教諭は担任と連携し、担任のニーズを把握し、担任が主体となり日常の保育の中で継続できるように活動を仕組んでいかねばならない。なぜなら、担任と養護教諭はそれぞれ異なる強みを持ち、互いに協力し合いながら教育活動を進めている存在だからである。養護教諭、担任の強みを表2のように分析した。

互いの強みを活かした取り組みが展開できれば、子どもたちの生活の中で体験や学びがつながり、子どもたちは、健康に生活するための望ましい価値観を形成していくであろう。

表2 養護教諭・担任の強み

養護教諭の強み	
a	健康診断、健康観察等の結果から、幼稚園全体の健康課題を把握することができる。
b	保健室を拠点とした健康相談を通して、子ども一人ひとりの心やからだの変化を細やかにキャッチすることができる。
c	専門知識を活かし、課題解決に向けた保健指導を立案し、実践することができる。
担任の強み	
a	日常的にクラスの子どもの健康課題をキャッチすることができる。
b	保育の中で継続的な指導や援助ができる立場にある。
c	個々の家庭状況を把握することができる。

2) 意図とねらいの共有

教職員それぞれが主体となった取り組みが、日常の保育の中で継続されるには、全ての教職員と様々な情報を共有し合わなければならない。特に保健指導実施前には、日々子どもたちの実態や健康診断結果等の根拠データに基づいて、取り組みの意図を明確にし、職員研修等で提示することが必要となる。全ての教職員が取り組みのねらいと、自分がすべき活動を理解できれば、子どもたちへの指導が統一される。そうすることで、子どもたちの学びや体験をつなげながら、成長に導くことができると考える。

③取り組みを生活につなげるキーワードの設定

子どもたちの生活の全般で取り組みをつなげていくために、具体的な行動の動機づけとなるキーワードを設定し、集団指導の中で示していく。そして、そのキーワードを家庭、教職員と共有し合えるようにする。

キーワードは保健指導のねらいを基に設定する。楽しく、簡潔な表現は、子どもたちをわくわくさせ、意欲を高めることにつながると考える。家庭、教職員それぞれが、日常生活の中でキーワードを基に取り組みを継続することができれば、子どもたちは行動の意味を理解し、意欲的に行動し、その習慣を身に付けていくものと考えられる。

(3) 「しめす」「みとめる」「みとる」

「しめす」「みとめる」「みとる」とは、子どもたちの生活全般で取り組みを継続させ、成長に導くための機能である。「しめす」「みとめる」「みとる」ことが家庭、教職員それぞれとの間で

日常的に共有されていくサイクルの中で、子どもたちは自己肯定感を高め、健康に関する望ましい価値観を形成していく。(図1参照)

以下に「しめす」「みとめる」「みとる」の具体的な活動と機能を述べる。

①「しめす」

「しめす」とは、望ましい生活習慣のモデルを提示することである。そのためには家庭と教職員とが、統一したモデルを姿で示すことが最も重要なので、前述のキーワードを基にそれぞれが日常生活の中で統一したモデルを示しながら、取り組みを継続していけるようにする。

教職員に対しては、保健指導実施前に取り組みの意図と前述のキーワードを示す。そして、実際の集団指導と、継続した個別の指導を行うことを通して、具体的な“指導のモデル”も示し、全ての教職員が日常の保育の中でキーワードを活かした取り組みを継続できるようにする。

家庭へは保健便りと掲示を中心にキーワードを示し、情報を共有し合う。また、担任も養護教諭の活動をつなげ、クラス便り等で子どもたちの成長や取り組みの様子を発信することが予想される。子どもが帰宅後に保護者に話すキーワードと、教職員が協働して発信するキーワードが一致することで、家庭でもキーワードを基に実践されていくようになるであろう。

②「みとめる」

「みとめる」とは、生活の中で子どもたちができるようになったことや気づきなどを刻々と評価し、価値づけることである。家庭と教職員それぞ

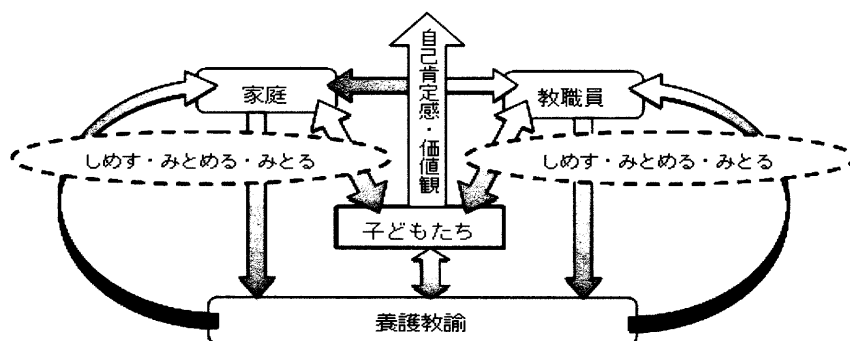


図1 「しめす」「みとめる」「みとる」の機能

れが生活全般を通して子どもたちのよきモデルとして姿で示しながら、刻々と価値づけ、認めていくことで子どもたちは自己肯定感を高める。そして、その価値を子どもたちが共有できるようにすることで、子どもたちを能動的学習主体としていく⁵⁾。

養護教諭は、子どもたちのよきモデルとして姿で示しながら、子どもたちの育ちを刻々と認め、その姿を家庭、教職員と共有し合っていく。そうしていくことで家庭、教職員それぞれも子どもたちの育ちを刻々と認め、またその姿を共有し合っていくものと予想する。また、教職員間で、教職員と家庭との間で、保護者同士で子どもたちの育ちを共有し合うことは、互いの認め合いにもつながっていくと考える。認められた喜びは子どもたちに還元され、子どもたちの意欲と達成感はより高まっていくであろう。

③「みとる」

「みとる」とは、日々の生活の中で子どもたちの育ちや課題をつかむことであり、それを基に次の取り組みの方向性を定めることでもある。

家庭、教職員それぞれが、示し、認めながら刻々と見取った情報を基に定めた次なる方向は、職員研修や保健便り等でタイムリーに示していく。家庭、教職員それぞれが、子どもたちの成長のために今後自分がすべき活動を理解し、日常生活の中で「しめす」「みとめる」「みとる」ことを継続し続けていくことで、子どもたちをさらに成長へと導くことができるであろう。

(4) ロジック・モデルに基づく評価と目標管理

子どもたちの生活を起点とし、創発的な保健室経営をしていくためには、長期的な見通しを持った評価と目標管理が不可欠である。そこで、ロジック・モデルを活用する。

ロジック・モデルは課題解決のための取り組みが理論上どう組み立てられ、最終成果がどのように実現するかを簡潔に示すための枠組みである。

ミッション、ビジョンから導かれた中期・短期成果から評価すべき主要課題を選択し、それぞれについて①取り組み・活動、②必要な投入(人、物、

資金、時間)、③活動結果、④成果を体系的に表現していく⁶⁾。ロジック・モデルを活用することで客観的なプロセス評価や成果評価が可能となると同時に、自己の取り組みに対する評価が可能となる⁷⁾。

これにより、「平成24年度子どもの育ちをつなぐ保健室経営ロジック・モデル」⁸⁾を表3に示す。なお、短期成果は一年後を想定し、中期成果は三年後を想定した。

3. 保健室経営の実際

―歯の健康づくりを中心とした保健指導―

(1) 取り組みに至った背景

私は今年度本園に赴任し、6月から歯の健康づくりに関する指導を中心に据えた保健室経営をはじめた。以下にその理由を述べる。

- ①定期歯科健診結果、5歳児「未処置者数」の割合が52.3%で、広島県平均(平成23年度)の21%を大きく上回っており、早急な取り組みの必要性を感じたこと。
- ②幼児期は乳歯から永久歯への生え変わり時期なので、歯の健康づくりは子どもにとっても保護者にとっても当面の健康課題であること。
- ③担任から提示された保育指導案の歯みがきの援助には「丁寧に磨くよう声をかける」等の記載がなされていたが「丁寧に」の具体はなく、また共通理解もなされていなかった。そのため、担任が統一した歯みがきの援助をするための仕組みが必要だと思われたこと。
- ④歯みがきは幼稚園でも家庭でも日常的に行う生活習慣なので、家庭とつながり、教職員と協働しながら、継続して取り組むことができると予想したこと。
- ⑤生活リズムについての実態把握はまだできていなかったが、幼児期の身近な健康課題として、今後扱いたいと考えた。歯の健康は、食生活を含めた生活リズムと密接に関係しており、歯みがきと関連付けた生活リズムの取り組みを展開していける可能性が高いと予想したこと。

表3 平成24年度子どもの育ちをつなぐ保健室経営ロジック・モデル

目 標	保健室経営理念：意図を明確にした活動 ミッション：家庭の教育力と教職員の教育力の組織化 ビジョン：子どもの育ちをつなぐ保健室経営	
課 題	家庭とつながる	教職員の協働
活 動	(1) コミュニケーション (2) 保健便りによる情報発信 (3) 掲示物による情報発信	(1) 担任との連携 (2) 職員研修によるねらいの共有 (3) 歯の健康づくりを中心とした生活習慣に関する集団指導 (4) 昼食・歯みがきの時間を利用した個別の指導と実態把握 (5) 成果と課題の分析
投 入	(1) コミュニケーションに要する時間 (2) 作成にかかる時間（3時間×6回） (3) 作成にかかる時間（1時間×6回）	(1) 担任との連携の時間（1日10分） (2) 準備と集まる時間の確保 (3) ①教材研究と準備に要する時間 ②クラス毎の指導にかかる時間 (4) 個別の指導等にかかる時間 (5) まとめ、分析に要する時間
想定結果	1 子どもの実態と保護者のニーズが把握できる 2 保健便り発行（年6回） 3 掲示物での情報発信（年6回） 4 発信した情報を基に家庭での日常的な実践が可能になる	1 子どもの実態と保護者のニーズが把握できる 2 保健指導（15分×5クラス×年6回） 3 個別の指導と実態把握（日50分×週2クラス） 4 担任による日常の指導が可能になる 5 今後の方向性が明確化する
短期成果	1 子どもの意欲と達成感が高まり、歯みがきを主体的にする園児が増える 2 子どもの生活全般で、取り組みが継続する 3 子どもの健康に関する家庭・教職員の意識が向上する	
中期成果	1 子どもの自己肯定感が高まり、健康に関する望ましい生活習慣が定着に向かう 2 取り組みの積み上げにより、取り組みの質が高まる 3 家庭を巻き込んだ取り組みが可能になる	

⑥歯は自分で観察できるすぐれたからだの教材なので、歯みがきは子どもたちの意欲を高めやすい。また、保護者も我が子の歯を観察できるので、家庭の関心を高める取り組みとしやすい。これらのことから、歯の健康づくりを中心とした保健指導を通して、自分のからだを大事にしようとする気持ちを育むことができると予想したこと。

(2) 年間の取り組みのねらい

年間の取り組みのねらいは次の二点とした。

- ①自分の歯と口の様子に興味を持てるようにする。
- ②食べたらみがく習慣が身に付き、自分でみがいた達成感を味わうことができるよう援助する。

(3) 職員研修

保健指導実施前に全ての教職員に対し、歯科健

診結果と取り組みのねらい、各学年の指導のねらい、キーワードを提示した。また、日常の援助のポイントを理解してもらうために、歯の模型を使って歯みがきの基本的なスキルを示した。合わせて、弁当と歯みがきの時間を利用し、養護教諭も継続した指導と援助を行うことを確約した。研修に要した時間は10分である。

(4) 保健忍法“ゆらゆら”みがきの術

保健指導は月一回、クラス毎に行うが、その指導がシリーズ化していけば、子どもたちの生活の中で毎月の保健指導がつながり、また、子どもたちは「今日のお話しは何か」と楽しみに待つようになると考えた。そこで、集団での保健指導は“保健忍術学園”として実施した。子どもたちに人気のテレビアニメをヒントに設定したもので、

養護教諭は忍術学園の“学園長”，子どもたちは“忍たま”となる。そしてキーワードは“修行”と称し，指導の冒頭“忍法〇〇の術”と巻物で提示する。字の読めない3歳児もわくわくさせることができた。

歯みがきのキーワードは“ゆらゆら”とした。“ゆらゆら”とは「歯を一本ずつやさしい力でみがく」ことを示す。幼児期においては「歯を一本ずつ」みがくことは難しい。しかし，小学校入学前までに六歳臼歯をみがくスキルを指導することを前提とすれば，3歳児から統一して“ゆらゆら”と指導しておけば，子どもたちを混乱させずに指導を積み上げることができると考えた。

集団指導では，歯の模型でみがき方を示したり，実際に“ゆらゆら”で自分の歯をみがく体験を通して，園児が“ゆらゆら”の意味と行動を共有し合えるようにした。

集団指導後は日常の保育の中で歯みがきを共にし，“いいゆらゆらだねえ”「前歯がきれいにみがけたねえ」と価値づけると共に，仕上げみがきをすることで，みがけた気持ちよさも実感できるようにした。

(5) 家庭とのコミュニケーションと情報発信

集団での指導の翌日，指導の様子を玄関に掲示すると，早速保護者から「“ゆらゆら”をお兄ちゃんに教えていました」等の感想を聞くことができたので，取り組みのねらいとキーワード，保護者の反応を保健便りで発信した。また，保護者啓発の一つとして，歯ブラシの持ち方と選び方，仕上げみがきの仕方を記載した。

その後も，子どもたちの成長がわかるエピソードや，保護者から寄せられた家庭での様子などを継続的に保健便りで発信している。

さらに，歯みがきの取り組みを実際に保護者に知ってもらう機会として保育参加⁹⁾を活用した。はじめは養護教諭が子どもたちの仕上げみがきをしていたのだが，我が子の歯をみがいてもらうよう声をかけ，保護者を巻き込んでいった。保護者からは「普段は忙しくてなかなかできない」という声もあった。

(6) “歯ぴかっ！”おやつへの創発的展開

9月に実施した生活習慣実態調査の結果，おやつに「砂糖の甘さのお菓子」を食べさせている保護者が多いことがわかった。むし歯が多い背景に，おやつの取り方があるのではないかと予想し，その翌月から取り組んだ。“歯ぴかっ！”とは「自然の甘さのおやつ」を示す。集団指導では子どもたちに人気のお菓子や“歯ぴかっ！”を実際に提示し，生活体験と重ね合わせることができるようにした。さらに，甘いお菓子を食べた後は歯みがきをするよといことを示していった。

(7) おやつに関する家庭への情報発信

集団指導と同じ時期に遠足があった。普段おやつとして子どもに食べさせているお菓子を保護者に意識してもらうため，子どもたちが遠足に持参していたおやつの写真を掲示した。保健便りでは指導のねらい，キーワード，生活習慣実態調査結果，子どもにとってのおやつの意義を発信した。併せて，おすすめ“歯ぴかっ！”を掲示した。

その後，保護者から「おすすめ“歯ぴかっ！”を保健便りでも特集してほしい」との要望があり，さらに，保健便りでも発信した。

(8) 教職員の活動

担任は子どもたちが弁当を食べたり，片付けたりするための援助に時間がかかり，直接歯みがきの指導を行う事は難しいが，“ゆらゆらした？”とキーワードで子どもたちに声をかける姿を見る。副担任からは子どもたちから仕上げみがきをせがまれてみがいた，というエピソードを聞いた。どうやら子どもたちは，養護教諭にしてもらった仕上げみがきが気に入ったらしい。

また，おやつの時間に担任が「歯ぴかっ！おやつよ」とりんごを出した際，子どもから「歯ぴかっ！て何？」という質問があったので，子どもが養護教諭の話を出せるようにした，というエピソードも聞いた。

(9) 保護者の活動

保護者から「忍法“ゆらゆら”みがき！と歯みがきの時に声をかけると嬉しそうにやっている」という報告を受けた。また「今朝“ゆらゆら”し

てきたよ」と、登園するとすぐに報告してくれる子どもたちの姿からも、キーワードを基に家庭の中で実践されていることがうかがえる。

保護者の同好会による絵本の読み語りの日、あるクラスの保護者が“ゆらゆら”みがきの取り組みとつながるようにと、歯みがきの絵本を選んでくれた。養護教諭が継続して取り組んだことが保護者に理解され、子どもの育ちをつなぐ保護者主体の新たな活動につながりはじめています。

4 今後に向けて

保健指導を中核とし、「しめす」「みとめる」「みとる」ことを家庭、教職員と日常的に共有し合う保健室経営としたことで、取り組みが子どもたちの生活全般で継続され、生活の中で子どもたちは能動的に学びはじめた。そのことは、“ゆらゆら”を合言葉に子どもたち同士で歯みがきをする姿や、5歳児が3歳児の仕上げみがきをしている姿(図2参照)、また、おやつ時間に「これは“歯ぴかっ!”じゃない」と砂糖で味付けされた芋けんぴにクリームを出す5歳児の姿などから見取ることができる。また、保護者から保健便りや保健指導に対する反応や保健室への要望が寄せられるようになったことから、保健便り等の情報を基に、家庭でも実践されている様子が見えてくる。

これらのことから、長期的な見通しの中で、日常的に家庭、教職員とつながり合い、「しめす」「みとめる」「みとる」ことを共有し合いながら、“その時”の子どもたちの実態に沿った保健指導を積み上げていけば、子どもたちの生活がダイナミックにつながり、子どもたちは生活の中で能動的に学びながら健康に関する望ましい生活習慣を身に付けていくものと予想する。さらには、子どもたちの能動的学びの質と、取り組み内容の質を高めることにもつながると考える。

子どもたちが生き生きと生活する中で、能動的に学びながら成長するための保健室経営をしていくには、子どもたちの目線で子どもの生活を見つ

め続けながら、私自身が「しめす」「みとめる」「みとる」活動を真摯にし続けていかねばならないことを肝に銘じ、今後も子どもの生活を起点とした保健室経営を実践していく。そして、取り組みを積み上げていくことで、子どもの育ちをつなぐ保健室経営の成果と課題を明らかにしていきたい。



図2 5歳児による仕上げみがき

<注および引用・参考文献>

- 1) 財団法人日本学校保健会：「保健室経営作成の手引き」, p. 4, 2009.
- 2) 前掲1), p. 10.
- 3) P.F.ドラッカー：「マネジメント―基本と原理―」, p. 299, 2001, ダイヤモンド社.
- 4) 吉本均：「学級で教えるということ」, pp. 117-120, 1979, 明治図書出版.
- 5) 前掲4), pp. 138-143.
- 6) 長尾眞文：「学校評価の理論と実践の課題」, 日本評価学会『日本評価研究』第7巻第1号 pp. 8-11, 2007.
- 7) 石田謙豪・平恵津子・住元しのぶ・長尾眞文：「自己評価の活用による学校改善の実践報告」, 日本評価学会『日本評価研究』第7巻第1号, pp. 23-24, 2007.
- 8) 前掲7), p. 31.
- 9) 保護者が実際に保育に参加することを通して、幼児期の健やかな成長や、それを支える家庭の在り方などについて考えるとこを目的として行われる。本園では毎年9・10月に、全園児の保護者を対象として実施する。